

分散会6

司会者 井上 裕也

記録者 高田 容弘

会場責任者 小池 源規

益田市教育委員会（島根県）

「つろうて子育てプロジェクト（TKP）」では、「地域の中で子どもたちの育ちの場をつくらう。」と取り組んでいる。この活動では、子どもたちの育ちのステージを、in ⇒ about ⇒ for ⇒ withのキャッチコピーでとらえ、いろいろな体験活動や学び、地域貢献活動をさせていく。そしてその活動が、どこでだれが何をやっているか分かるようにする、「見える化」を考えた。そこで構築したのが、サイボーズ社のアプリを活用して作った『益田市ふるさと教育まるしえ』（クラウドを活用して関係者すべてが情報を共有できるシステム）である。12の中学校区ごとに、保育所+小学校+中学校+公民館+地域コーディネーターがパスワードを共有し、システム上に子どもたちに経験させたそれぞれの「ひと・もの・こと」を地図上に入力（写真、テーマ、コメント、カテゴリーを記入）するとともに、絶えずやったことを更新・改善し、最新の現状を市内の関係者全員で共有している。これをもとにして、年に4回関係者が集まり研修をしている。足りない部分を探したり、各学校では何ができるか、来年度な何ができるか等、横に「見える化」したりすることで、若干の競い合いをしたり、お互いのことを知り合い、情報を共有し合ったりしている。



〈大畑 伸幸さん〉

地域の家「ココカラ★ハウス」（香川県）

香川県の地域の家「ココカラ★ハウス」という場所で、子どもたちが楽しく心地のよい居場所（子どもたちのつまづきや立ち止まりを受け入れ、試行錯誤の中でゆっくりと子どもが育つことを保証する場）づくりをしている。「子どもチャレンジ塾」では、子どもの遊びを中心にして、学びを広げている。一日3時間、勉強や遊び、夕食を共にする。ここには、さまざまな困難を抱えた子どもたちが来ている。そのため勉強では、それぞれに合った課題を設定し、「できた」という達成感を味わわせるようにしている。遊びでは、自分たちでルールを決めて守ることを意識させたり、思い切り感情を出させたり、相手の気持ちを考えることを大切にさせたりしながら、「しっかり楽しむ」をキーワードにして遊ばせている。そして、夕食にみんなでおいぎりを作って食べる「共食」を大切に、子どもたちとのつながりを深めている。さらに、子どもたちの成長を願い、丸亀市沖の島に「ひみつ基地」を建てた。そこでは、異年齢の関わりを広げている。また、年齢横断型のキャリア教育「ココカラ通信社」という3日間限りの会社で働く職業体験も行っている。居場所づくりを通して、子どもたちが互いに尊重されて愛されていることを実感し、その関わりを通して、未来を見つめて選択する力を身に付けてほしいと願っている。



〈中川 晴加さん〉

まちづくり学校双海人（愛媛県）

伊予市双海町の学び舎「まちづくり学校 双海人」では、『学習から実践へ』を合言葉に、町内外在住の約50人が、様々な地域づくり活動に取り組んでいる。キーワードは、「多様性」「対等・平等」「オープン」「まずは小さな社会実験から」。いろいろな活動があるが、特に地域のシンボルである学校を守るため、子育て世代や若い世代をターゲットに移住支援に力を注いでいる。地域では、子どもや若い人が減り空き家が増える一方で、田舎暮らしを望む都市部の人も増えている。簡単にマッチングできそうに見えるこの両者だが、現実には障壁がたくさんある。それを打開すべく、住民主導による地域のための新しい移住の取組を推進している。実際の取組としては、①空き家調査（意向調査）… 一番大切で難しい。間をつなぐ役割と空き家バンクの整備。②情報発信… インターネット・SNS・フェイスブック・ツイッター・移住イベントで都市部の人にアピール。③移住、相談、見学などの対応… 一度来てもらい、先輩移住者との交流をするツアーの実施。成果としては、15名の小学校で、2年間で6名の子どもが増えた。地域づくりが目的の団体がやっている移住促進なので、来てからがスタートである。来た人が地域でどのように暮らし、どう活躍していくかを課題として取り組んでいる。



〈本多 正彦さん〉

○分散会質疑応答

益田市教育委員会（島根県）大畑伸幸さんの取組について

Q. そのアプリは誰が見られるのか。

A. 関わっている人（教員・地域のコーディネーター・公民館職員）。学校のパソコンルームから他の学校での取組を子どもたちも確認できる。

Q. 地域のどの年代の方が関わっているのか。

A. 昔は年配の方が多かったが、最近は若い人が増えてきた。それはI・Uターンが多くなってきたから。親世代が多くなってきた。

Q. 民間はどのように関わっていけばよいか。

A. 民間の専門家の方の力をしっかり借りる。NPOの立場で活動される方を育てている。公民館を通じて委託するなど、地域の方に認知していただくことが大切である。また、市の体育協会の事務局など、民間の力を行政内に置いている。行政も、安定的に活動できるように民間の力を取り入れている。必ず民間の力が必要になり、専門的なことは専門家に任せるということになってくるので、苦しいが民間が頑張ってもらいたい。

Q. NPOについて具体的に教えてほしい。

A. スポーツクラブ（サッカー中心）、おやじーズなど、約30のグループが登録されている。まだ法人格をもつところは少ない。

Q. 益田市の児童クラブの実態はどうか。

A. 益田市でも放課後児童クラブとの連携はしているが、問題は考え方や取組の差があることだ。校舎内への放課後児童クラブの移転進めているが、そこで放課後児童教室と児童クラブをいい具合に融合させてやっているところが2か所あり、どんどん増やしていきたいと考えている。社会教育からすると、お客さんが毎日来るのは放課後児童クラブなので、個々の活動をもっといろいろな方の力で豊かにしていけば子どもたちの育ちはよくなると思っている。「親も頑張るけど、親以外の所で親にできないことをしっかりしましょう。」を共通認識として、「親頑張れ」は益田市では言わないようにしている。放課後児童クラブは次の鍵になると思い、攻め込んでいる。

○ その他意見交流

・いいなと思うのは、社会教育課に学校の教員が入っていることである。西予市も公民館で若い主事が頑張っているし、学校も地域学などに熱心に取り組んでいる。ただ、それぞれが単独でやっているのだから、共有化させたり、競争させたり、集まってワークショップをさせたりするなど、音頭をとる力が市の生涯学習課にもっとほしい。

・社会教育は子どものことではないが、子どもを通して人が集まり、地域がまとまっていく。

・地域づくりのキーワードは、防災と子どもだ。

・社会教育への理解が大切。社会教育について知らない教員がたくさんいる。社会教育を実践するのは学校だ。



地域の家「ココカラ★ハウス」(香川県) 中川晴加さんの取組について

Q. 毎日開いているのか。

A. 週に1回。

Q. 一軒家はどこの所有か。

A. 代表の実家を使っている。

Q. 何人くらい利用しているか。

A. 勉強は小学生が4人、中学生が2人、さまざまな活動には20~30人が来ている。

Q. 料金はいくらか。

A. 小学生が月6,500円、中学生10,000円、高校生・大学生がボランティアで入ってくれている。活動費に助成金もいただいている。

Q. 香川大学が関係あるのか、それともロコミか？

A. ロコミでいろいろな大学の学生が約40人来ている。

Q. 行政との関わりはあるのか。

A. 代表が中心にやっている。分かっていないところもあるが、サポートステーションと連携していきたい。利用数から助成を受けられないなど、厳しい現実が分かってきた。

Q. 大学生への研修はあるのか。

A. 自分たちで関わって学んでいる。反省会の場で相談したり、情報共有の中で学んだりしている。

Q. 課題は何か。

A. ロコミだけなので、集まるときとそうでないときがある。これから先どうつなげていくか。経費の問題もある。



まちづくり学校双海人(愛媛県) 本多正彦さんの取組について

Q. 毎月のテーマはどのように決めているか。

A. 年度ごとに募集している。謝金のことなどを考えて職員会議で決める。

Q. 移住してきた後のフォローはあるのか。

A. 住民団体なので予算はない。できることは人とつなぐこと。つなぐ相手は地域住民であったり行政であったりする。規模とスピード感が大切である。地元を尊重してくれる人に来てほしい。移住者の方と地元の方との交流に取り組んでいる。

Q. 団体は民間なのか。

A. 市が支援している団体でもある。自治組織である。

Q. なぜそんなに集まるのか。

A. これまでの教育活動や、やっているテーマ、お母さんたちのネットワークにより、人が人を呼ぶ。市の職員が上手に入っている。みんなが集まって考えることが当たり前になっている。田舎は集落単位で動くところがあるが、「この指とまれ方式」でやりたいことがある人の場を作り、年齢関係なく、自由な議論ができているのでアイデアが生まれる。いろいろな団体ができるとよい。それをうまくつなぐことが大切である。市の職員と団体とのグレーゾーンがあってもよいのではないのではないだろうか。

